

# 「日本写真保存センター」調査活動報告(32)

写真撮影の初心をまとめた写真原板と教育利用のための写真の収集 松本 徳彦 (副会長)

写真家はいつどういった動機から、写真撮影の道に入ったのであろうかを探ることも、保存センターの仕事である。ある人は家業を継ぐためであったり、街中に氾濫する写真から興味を抱いたり、趣味として始めたり、職業意識をもって撮影意図を明確にして取り掛かった人もおられるだろう。

## ■島内英佑さん

島内英佑さんは1937(昭和12)年、高知県幡多郡佐賀町の造り酒屋の次男として生まれる。父圀蔵は日中戦争が始まったころ流行っていたアマチュア・カメラマンとして町で知れ渡っていた。ドイツのツアイス・アイコンが製造したアイコンタ・シックスはスプリングカメラの名器として誰もが持てるカメラではなかった。長兄吉康も家業を継ぎ、傍らでアマチュアとしてカメラ雑誌に投稿し数々の賞を得るなど、写真一家といった環境で英佑は育った。

1955(昭和30)年、日本大学芸術学部写真学科に入学し本格的に撮影に励む。在学中渡辺義雄氏の推薦で『サンケイカメラ』〈ルーキー登場〉欄に「光る川」(58年)を発表する。卒業制作のテーマを「四国三郎-吉野川-」に定め、約2年間かけて吉野川流域で暮らす人々と風景を、上流から河口までを地図を片手に自転車で踏破し、フォトストーリーとした。

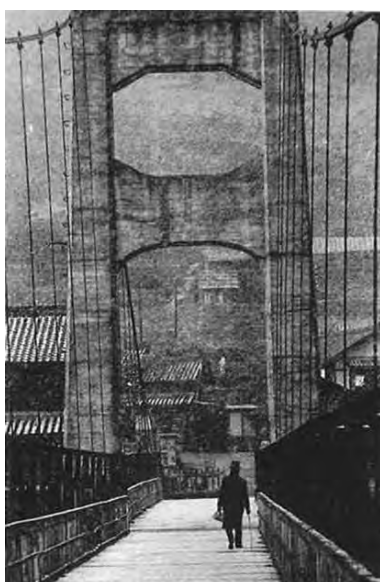
1959(昭和34)年光文社写真部に入社。『少年』『少女』『面白倶楽部』『カッパノベルズ』等の撮影に従事する。1962(昭和37)年フリーとなり、平凡社の雑誌『太陽』の囑託。1964(昭和39)年『アサヒカメラ』〈新人〉欄に「ある典型-東京駅-」を発表するなど、雑誌メディアでの活動が光る。個展に「ボンジュール・パリ」(新宿ニコンサロン72年)、「フランスの詩」(三菱オートガーデン74年)、「南の風-パラオ・セブ紀行-」(キヤノンサロン78年)などがあり、1979(昭和54)年個展「吉野川ふたむかし」(ニコンサロン)を催す。主な撮影は国内外の旅紀行、食文化を諸雑誌に発表する。

今回収蔵した写真原板は処女

作である写真集『吉野川ふたむかし』(教育出版センター79年発行)に掲載された写真から選んだ。モノクロフィルム201本がコンタクトプリントとともに整理されており、学生時代の取材メモなどを収集した。

この写真集には作家の森村誠氏が「川と人生」と題して、「川はよく人生に譬えられる。内陸の奥深くに源を発し、急流にもみしだかれ、滝つ瀬となって落下し、淵に激み、平原に出でて川幅を広げ、紆余曲折しつつ、遂に河口より海に至る。この変転の過程は、まさに人生である。まことに「行く川の流れば絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と栖とまたかくのごとし」であると記し、島内の写真について、「氏は、吉野川(四国第一の長流)という日本の美しい川の一つを生命ある被写体として凝視し、その源の誕生から海に注ぐまでを有機的にとらえ、卓抜したカメラアイによって見事によみがえらせた。

写真は大雨が降ると氾濫を繰り返す「四国三郎」の源流を求めて高知、愛媛の県境付近から始まり、最奥の集落、伝説では壇之浦の合戦で敗れた平家の落人が住み着いたといわれる寺川の雪道を歩む。水資源の宝庫である上流域には複数のダムが造られ、発電と水がめで都市用水と農業用水、道路も整備される。和紙の



土地の有力者が金婚記念に贈った大川つり橋(雪が舞う3月)



現在は欄干が造られ、涼を求めて子供たちは読書に夢中(8月)

原料コウゾの生産も盛んである。大歩危・小歩危の溪谷には観光客が絶えない。兩岸は絶壁で手漕ぎの渡し舟で渡る。待望のつり橋ができ人の交流が盛んになる。阿波の人形浄瑠璃の頭はこの地で作られる。次第に川幅も広がり徳



カメラを通しての島内さんの川に寄せた限らない愛情と郷愁がある。『吉野川ふたむかし』教育出版センター 1981年

島市へと流れ紀伊水道へ。全長194キロメートル、流域3650平方メートルの大河で人の暮らしと川の景観を捉えた旅は終わる。

1958(昭和33~34)年ごろに記された『吉野川撮影旅行日記』と、源流から河口までの5万分の1地図9枚があり、吉野川筋に沿って踏破した折々の様子や出会った人たちとの会話、食べ物、取材日誌などが地図の周辺に書き込まれ、写真集とともに見ると写真を撮った時の印象が手に取るように分かる旅紀行となっている。保存センターの原板台帳のメタデータを整えるのに大変参考になる。今後は『吉野川』を起点としてご家族の協力を得ながら順次残されている原板の整理を進め、島内さんの業績をまとめていく予定である。

## ■高野伸二さん

日本写真保存センターでは、文化庁が「著作物の教育利用」に関する補償金制度の改定を行い、教育利用のための写真の収集、利活用の促進を図っていることを見据えて、この状況を有効に活用するために、写

真収集の範囲を自然科学、動植物の生態などを学術的に捉えた写真にまで拡大することにした。その第一弾が財団法人日本野鳥の会理事の高野伸二著の『日本産鳥類図鑑』や『日本の野鳥』などから、野鳥を捉えたカラー写真を約450本収集した。

高野が初めてカメラと望遠レンズを購入して撮影を始めたのは1955(昭和30)年からという。水鳥の渡来地は千葉県行徳あたりだったが、近年、干潟が埋め立てられマンションや住宅が建ち並び、野鳥を観る機会がどんどん少なくなってきた。反面、マスメディアが自然志向を強く打ち出せば出すほど、野鳥を撮ろうとする人は増え続けた。しかし、自然環境保護への関心が乏しく、野鳥生息地への環境破壊が進み、その上、珍しい瞬間だけを撮ろうとするマナーの悪い人が増えて困っているという。それだけに野鳥の生態を捉えた写真は貴重で残す必要がある。

高野氏は1926(昭和1)年東京四谷で生まれ、小学校に入る前から、庭に来る鳥を毎朝晩眺め、中学生のころには鳥類生態写真の先駆者として知られる下村兼史(1903~67)の写真に憧れ、冬鳥のふるさと大陸満州(今の中国東北)の学校に進学(44年)、現地でツルやノガン、ヤツガシラなどの観察を続けた。国立吉林師道大学から招集され、敗戦でシベリア抑留生活を経験。帰国後東京教育大学、大学院理学研究科博士課程を終え(58年)、白金の国立自然教育園に勤務(60年)、日本鳥類保護連盟を経てフリー(72年)、日本野鳥の会理事を歴任。鳥の生態写真集や野外図鑑などの出版に関わり、多くの著作をあらわし関係者からは「生きた図鑑」と呼ばれていた。(84年没)

この度の収集(35ミリカラー450本約8,000コマ)と書籍、資料等には、日本野鳥の会常務理事の塚本洋三氏の多大なお世話をいただいた。



シロハラ(Turdus pallidus) 東京日野  
トキワサンザシの赤い実を飲み込もうとする瞬間



アマザモ(Bubulcus cbis) 北海道根室  
放牧されている馬が追い出すカエルを狙って、一緒に行動する